

「個人的」かつ「フランス的」だが 「非フランス的」？

——メシアンの世界——

沼野雄司



オリヴィエ・メシアン (1908～92)

読響は2017年11月に、創立55周年の一大プロジェクトとして、メシアン(1908～92) 唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉に常任指揮者カンブルランと挑みます(演奏会形式・全曲日本初演)。本公演に向けて、本誌ではメシアンに関する特集を「アッシジへの道」として連載します。第1回の今回は、フランス音楽史も交えながらメシアンとその音楽について紹介します。

『わが音楽語法』

つい先日、学生と一緒にメシアンの著書『わが音楽語法』(1944)をフランス語の原書で読む機会があった。だいぶ前に邦訳(早くも1950年代に平尾貴四男によってなされている。ちなみに平尾は読響首席オーボエ奏者辻功の

祖父)にざっと目は通したものの、原書をきちんと読むのは初めて。もちろん全部は長いので、ほんの3章ほどにすぎないのだが、面白い体験だった。

あらためて感じたのは、実に奇妙な書物だということ。そして、その奇妙な感触がメシアンの音楽から受けるそれと、かなりの程度、相似形を成しているということ。

延々と綴られているのは、いかにしてリズムから、調性から、形式から逃れるのか、というマニュアルである。例えば「付加リズム」。原理はきわめて簡単だ。4分音符が4つ続く、なんの変哲もない4拍子の音楽があるとして、その4番目の音符にだけ付点を付けてみる。すると小節全体としては4.5拍子の、いくぶんギクシャクしたリズムが生まれる。方法論自体はさして難しいものではないが、結果として少しばかり妙な音楽ができあがるというわけだ。

音階や和声に関しても、ほぼ同様の、いわば「ずらし方」が延々と述べられ、そのまま素っ気なくも唐突に書物は終わる。

自らの「作曲技法」を詳らかにする作曲家は少なくない。しかし、そうした文章のほとんどが一種のマニフェストとして、どこか自慢気な相貌をたたえているのに対して、メシアンの書物は彼のやり方が淡々と述べられているだけだ。ここが奇妙で、面白い。文字通り、これは「わが」音楽語法なのである。

メシアンの音楽から筆者が受けるのも、それが音楽史に類をみないほどに「個人的」だという感触にほかならない。新しい作曲技法を開拓したという意味において「個人的」なのではない。エネルギーが神秘的でありなが

ら、しかし素っ気なくも延々と自らについて語り続ける音楽。あの本と同じだ。こんなふうに「個人的」な音楽が他にあるだろうか。

フランス的作曲家？

「フランス音楽」とはなにか。

実は音楽史を中世から現代までの長いスパンで見れば、フランスという存在は圧倒的に重要であり、パリこそが真の意味で「音楽の都」というにふさわしい。バロック時代以降に限ってみても、ラモーやリュリといった典雅なオペラ作曲家、クーブランを始めとする器楽作曲家が活躍し、フランス革命を経た後はロッシーニからショパンにいたるヨーロッパ中の作曲家がこの街に集まり華を咲かせることになった。さらに近代に入ってからドビュッシーやラヴェルの活躍はご存知のとおり。そして、この後に名を連ねる大物がメシアンというわけだ。

メシアンは、一般に「20世紀フランスを代表する作曲家」と呼ばれている。では一体、彼はいかなる意味において「フランス的」なのだろうか？

日本におけるフランスのイメージといえば、一般には洒脱、オシャレといったものだろう。しかし、これらの単語を基準にするならば、メシアンはま

ったくフランス的ではない。というのも、彼の管弦楽曲の多くは、むしろどぎつい天然色が執拗に反復される音楽ばかりだからだ。ショーソンやプーランクならば「パリの酒脱」と重ね合わせることもできるけれども、メシアンはむしろ肉食系の作曲家という方がぴったりくる。

ただし、落ち着いてフランス音楽の歴史を辿ってみれば、それが決してオシャレで軽妙な響きばかりではないことは自明だろう。例えばベルリオーズはコテコテに濃い作曲家だし、時として「オシャレ」派のように考えられているドビュッシーやラヴェルも、後期の本格的な作品に注目するならば、むしろ暗くドロドロした音楽ばかり。

ついでに言えばスタンダールもバルザックも、マラルメもブルーストも濃厚・長大な作家だった。メシアンはこの系譜に連なる点において、まさしくフランス的な芸術家なのである。

非フランス的作曲家？

メシアンは自身を「鳥類学者にしてリズム家」と称していた。

彼が鳥の声を頻繁に楽曲に取り込んだことは、誰もが知るところだろう。1月に演奏される〈彼方の閃光〉の第9楽章“生命の樹に棲む多くの鳥たち”



鳥のさえずりを採譜するメシアン

でも、様々な楽器によって25種類の鳥の声が錯乱的に鳴り響く。

一方、もうひとつの「リズム家」という部分はちょっとばかり興味深い。というのも、あえていえばこの側面において、メシアンの音楽は「非フランス的」であるようにも思われるからである。

大雑把な言い方になるが、デュカスの〈ラ・ペリ〉などの例を挙げるまでもなく、近代フランスの管弦楽作品は基本的にバレエ音楽として書かれている。普仏戦争以降のフランス音楽が、ドイツ的な交響曲や交響詩の概念から距離を置こうとしたとき、これはほとんど不可避の選択肢だった。

ところが、先の「付加リズム」に代表されるようなメシアンの探求は、シンメトリックなリズム型への偏愛こそあるものの、身体や舞踊をやんわりと拒む。メシアン自身、自分のリズムは「不等分な持続の運動」を基礎に持つと言うだけあって、踊りには適さない

音楽なのだ。

おびただしい反復要素を持ちながらも、メシアンのリズムは決して一方向に流れず、捻じ曲げられた形で循環を繰り返す。この点において、メシアンにおける「リズム家」「リズム的音楽」という語は、伝統的なクラシック音楽における用語法とは、だいぶ様相を異にしている。

リアルな色彩という牢獄

先ほどメシアンの作品は「どぎつい天然色の執拗な反復」だと書いた。音楽に関するこうした表現は、普通は比喻にすぎない。音に色などないからだ。しかし典型的な共感覚者であったメシアンにとって、音の色彩は現実存在するものだった。

共感覚とは、本来は関わり合うはずのない複数の感覚が連動することを指す。面白い例としては、ミントを食べると円柱をさすっているような触感が両手に生じる、などというものがあるが、この場合には味覚と触覚が連動しているわけだ。「私は音楽を聴いたり、あるいは楽譜を読んでも、自分の内部で、つまり精神の眼で、音楽と共に動く色彩を見ることができ」というメシアンは、ある時、紫の照明の中でト長調の音楽が鳴るのを聴いて、気

分が悪くなってしまったという。彼にとって「紫」と「ト長調」は相容れない要素なのだ。

とすれば、当然ながらメシアンは自分の作品を、様々な色彩の連なりとして聴いていたのだろう。共感覚を持たない我々は想像するよりほかないのだが、多分、それは単に楽しいだけではすまない経験だったはずだ。常に色が見えてしまうというのは、時には牢獄の中のように辛いことではなかろうか。そして、その色彩をコントロールするために、あのような独特の理論体系が必要になったのではなかろうか。

メシアンは晩年に日本で行った講演の中で、カトリック信仰を持たず、音に色彩を感じない人には自分の音楽は理解できない、といった意味のことを述べている。確かにそうなのだろう。我々にとってメシアンの音楽はどう近づけばよいのかわからない、きわめて「個人的」なものだ。

しかし、だからこそ、この音楽は触れる価値がある。

単に感覚に快い響きを聴くのではなく、未来の音楽へのマニフェストを聴くでもない。ただひたすらにメシアンという稀有な個人に耳を傾けること。こういう体験は、他の作曲家ではできない。

(ぬまの ゆうじ・音楽学、桐朋学園大学教授)

次回は4月号に掲載します

心に残るクラシック

猪木武徳 ①

Takenori Inoki



悪魔のように細心に、天使のように大胆に モーツァルト：交響曲 第39番 K.543

わたしは高校時代からずっと「モーツァルト狂」を貫いてきた。モーツァルトとなると、交響曲、協奏曲、室内楽曲、器楽曲、宗教曲、声楽曲、そしてオペラ、とジャンルを問わず、機会があれば多少の無理と危険を冒しても、生の演奏を聴くために出かけて行ったものだ。アマデウスと家族の書簡も読んだ。生半可な理解ではあるが、モーツァルトについての研究書にも目を通した。とにかく、モーツァルトに関することなら何でも知りたいと思ったからだ。今様の言葉で言うと、「オタク」とか「マニア」ということになるのだろうか。

歳のせいか最近はいよいよ「モーツァルトの霊」が落ちたようだが、それでもモーツァルトについて痛感することがまだまだある。ひとつは、モーツァルトのオペラは十分知り尽くしていないということ（〈フィガロの結婚〉も〈ドン・ジョヴァンニ〉も〈魔笛〉もい

いが、やっぱり〈コジ・ファン・トゥッテ〉だと思う）。もうひとつは、彼の作曲技法の「大胆さ」に改めて驚くことだ。わたしの「驚き」は、専門家から見れば驚きでも何でもないのかもしれないが、わたしはやっぱり驚いてしまう。

例をひとつあげよう。交響曲第39番 変ホ長調 K.543である。この曲は彼の最後の交響曲3作品のひとつだ。小林秀雄が大阪道頓堀をうろついていたとき突然頭の中で鳴った（？）という第40番、最後のフーガの美しい第41番、いずれも傑作であるが、わたしがモーツァルトの大胆な一面に驚いたのは第39番だ。

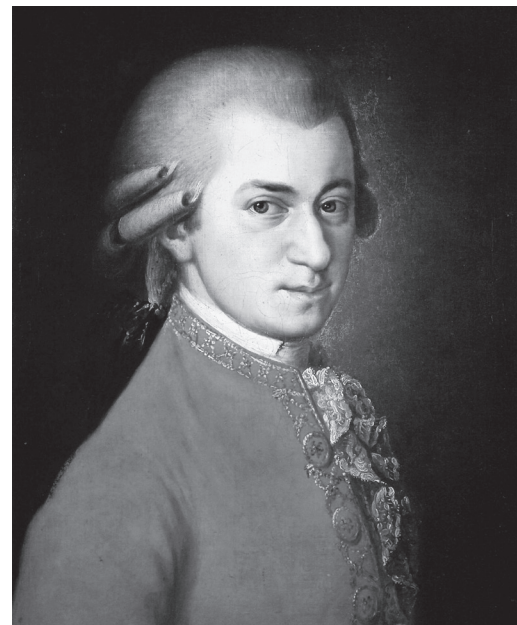
第39番の第1楽章の冒頭のアダージョを演奏会場で聴いた時、この導入部の最後の方で、ヴァイオリンと管楽器の奏でるなんとも激しい不協和音のぶつかり合いに、「なんだ」と驚いてしまったのだ。とてつもない悲鳴を思

わせるような不協和音。もちろん演奏者の音程が狂っているわけではない。レコードで聴いてみても間違いなく、激しく^{とが}突ったような不協和音なのだ。一体どうなっているのかという思いで、スコアを求めて調べてみた。第18小節を見ると、第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンがそれぞれ、C=ドと半音隣のDes=レ^bをフォルテでぶつけ合っているのだ。あの一見穏やかそうなモーツァルトのシンフォニーにところどころ現れるこうした大胆な「手口」に、同時代の人はびっくりしたのではなか

ろうか。不協和音がただならぬ緊張を生み、やがてその緊張は緩和される。

モーツァルトには、始めから終わるまで一見温和な和声の連続でできあがっているように聞こえる作品もある。だがそのような音楽にも、少しひねった和声が忍び込んでいるものだ（例えば〈アヴェ・ヴェルム・コルプス〉）。単純な協和音の連続は、何の変化もない人間の感情や生活のように、われわれの心を動かすことはない。アリストテレスの「カタルシス」の理論ではないが、不協和音が緊張や怖れの感情を生み出すとすれば、そこから解放されることには精神が浄化されるような作用があるのだろう。

モーツァルトはこの効果を知ってい



モーツァルト

たはずだ。強烈な不協和音を用いる大胆さと、それを解決して浄化へと導く細心さの双方を彼は持ち合わせていたようだ。昔、黒澤明監督が登場するテレビのコマーシャルに「悪魔のように細心に、天使のように大胆に」というのがあった。これはモーツァルトにも当てはまる言葉だ。『聖書』の中の「蛇のように賢く、鳩のように素直に」も同じような意味にもとれるが、「蛇」が苦手な筆者には、断然、この悪魔と天使の譬えの方がピッタリくる。

profile いのき・たけのり

1945年滋賀県生まれ。経済学者。大阪大学名誉教授。元日本経済学会会長。国際日本文化研究センター所長、青山学院大学特任教授等を歴任。主な著書に、『経済思想』（サントリー学芸賞）、『自由と秩序』（読売・吉野作造賞）、『戦後世界経済史』など。

◎首席クラリネット奏者

藤井 洋子

Youko Fujii

新しい発見がある

一日中吹いても飽きない楽器です

《今月のプログラムはフランスものが多い。フランスに留学していた藤井さんにとっても魅力いっぱいでは》

25日の《名曲シリーズ》はフランス音楽特集ですね。カンブルランさんならではの魅力的なラインナップです。ショーソンの交響曲は初めてですが、楽しみです。31日《定期演奏会》のメシアンの《彼方の閃光》も初めて。なんと10本のクラリネットが登場し、私は3番を演奏します。コントラバスクラリネットという珍しい楽器も。メシアン独特の鳥の鳴き声そっくりなパッセージが沢山出てきて、フルートが大活躍します。どんな演奏になるのでしょうかね。《20日にはよみうり大手町ホールで、ウェーバーのクラリネット協奏曲を演奏します》

素晴らしい機会を頂けて感謝しています。クラリネットの特色を生かした華やかで上品な、おしゃべりな曲。オペラのような曲です。私はとても怖がりますが、いいホールで演奏できるの

で、怖じ気付いてはもったいないという気持ちで頑張ります。

《いずれもカンブルランさんの指揮です。どんな指揮ですか？》

カンブルランさんは作曲者と楽譜に対し、先入観にとらわれずに向き合い、決してとどまることがありません。指揮は、あたかも魔法使いの棒のよう。ついていくと音が変化して、不思議な音が出る。いつもびっくりさせられます。「いつもと同じ」という感覚とは縁遠い方です。

《カンブルランさんは、「本番はリハーサル通りではなく、その場で出てくる音を楽しもう、それが特別な音楽が生まれる瞬間だ」と語っています》

彼は自由やファンタジーを大事にする。そこが好きなところ。日本人は本番に向けてきちんと積み上げていくのがリハーサルだと思いがちだけど、彼はそうではない。だからこそ、本番で尋常ではない集中力が生まれて、凄^{すご}い演奏になる。読響^{よきょう}に対していつも一所懸命に真摯^{しんし}に向き合って下さっていて胸を打たれます。震災後も真っ先に来て下さり、私たちをよく見ていました。何を感じて、どんな問題を抱えているのかと。私たちを大事に思っていて下さっているのを忘れてはいけな



いと思うのですよ。

《藤井さんは桐朋学園大からパリ国立高等音楽院を卒業。新日本フィルの副首席を経て1991年に読響へ。読響での演奏歴26年のベテランだ》

いえいえベテランではありません。指揮者、ソリスト、楽員の皆さんから頂いたものの大きさは計り知れません。大好きな音楽を仕事にでき、多くのことを学べるなんて本当に幸せだと感じています。オーケストラは、指揮者とコミュニケーションをとる団員同士の共同作業で、持てる能力を駆使しての真剣勝負です。無論、いつも上手く行くわけではありませんが、そんな時は誰かのせいにするのではなく、何故なのかをまず自分に問いかけます。

皆がそれぞれの時を経て、舞台上にいる。指揮者もオーケストラも。そう考えると今が大切だと思えるのです。自分の思っていることと違うことを違和感ととらえるか、面白いと思うかでその先の人生変わってくるのではないのでしょうか。私は、好奇心いっぱい豊かな人生を送りたいと思います。《演奏会后、指揮者から起立するよう促されますね》

もちろん自分の演奏が認めてもらえたら嬉しいです。そうそう、小林研一郎さんの指揮の時でした。自分としては、演奏がうまく

いかなかったので立ちたくないとおねたんです。そしたら、コバケンさんが近寄ってきて「人間だもの」と一言。これには周りのみんなが爆笑して、私も渋々立ちました(笑)。

《最後に、クラリネットの魅力について語って下さい》

小学4年で始めてから今まで、本当に飽きません。音域が幅広くていろんな音色を出せるし、他の楽器とも溶け合いやすい。フルートとオーボエのユニゾン、ファゴットやホルンとのハーモニー。いろいろ実験してみると結果が出る。それをもとに新しい発見ができたらいいなと思う。こんな音が出せた、こんな風に吹けると。許されれば一日中でも吹いていると思います。

尾高忠明が指揮する珠玉の名曲選&仲道が弾くシューマン

3/4 (土) 15:00 特別演奏会
千葉県文化会館

スメタナ：交響詩〈モルダウ〉
シューマン：ピアノ協奏曲
ディーリアス：楽園への道
エルガー：行進曲〈威風堂々〉第1番
シベリウス：悲しきワルツ
ラヴェル：〈ボレロ〉

指揮：尾高忠明（名誉客演指揮者）
ピアノ：仲道郁代



尾高忠明



仲道郁代

下野竜也が万感の想いを胸にブルックナーを振る！

3/9 (木) 19:00 第16回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール（大阪）

3/10 (金) 19:00 鳥取特別演奏会
とりぎん文化会館 梨花ホール（鳥取）

3/11 (土) 18:00 読響名曲シリーズ 福岡公演
アクロス福岡シンフォニーホール（福岡）

モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲 第3番
ブルックナー：交響曲 第7番

指揮：下野竜也（首席客演指揮者）
ヴァイオリン：アレクサンドラ・スム



下野竜也



アレクサンドラ・スム

首席客演としての最終公演。〈新世界〉で有終の美を飾る

3/18 (土) 14:00 第195回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/19 (日) 14:00 第195回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/20 (月祝) 14:00 第94回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

パッヘルベル：カノン
フィリップ・グラス：ヴァイオリン協奏曲 第1番
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：下野竜也（首席客演指揮者）
ヴァイオリン：三浦文彰



下野竜也



三浦文彰

3月 公演の聴きどころ

3月4日は千葉県文化会館（千葉市中央区）で、特別演奏会を開催する。読響の名誉客演指揮者で国際的に活躍する尾高忠明が、〈ボレロ〉〈モルダウ〉〈威風堂々〉など誰もが一度は耳にしたことがある、クラシック音楽の珠玉の名曲を振る。また、ロマン派のピアノ協奏曲の中でも人気のシューマンのピアノ協奏曲では、日本を代表するピアニストの仲道郁代が共演。濃厚な情緒にあふれたメロディを華麗に歌いあげる。

9～11日は大阪・鳥取・福岡公演に、首席客演指揮者の下野竜也が登場し、読響が得意な作品でもあるブルックナーの交響曲第7番で腕を振るう。ブルックナーの交響曲の中でも最高傑作の呼び声が高い第7番は、宇宙をも包み込むような壮大で美しい響きが特徴で、生きる喜びにあふれた感動的な音楽だ。下野&読響が奏でる光輝くハーモニーをご堪能いただきたい。前半のモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第3番では、フランス在住の新星アレクサンドラ・スムがソリストを務める。小澤征爾も絶賛する若手が披露する表情豊かな独奏に注目したい。

18・19日の《マチネー》、20日の《みなとみらいホリデー名曲》は、下野が読響の首席客演指揮者として振る最後のプログラム。前半では、同じ音形が繰り返されるパッヘルベル〈カノン〉と、執拗な反復を特徴のひとつとするミニマル・ミュージックの大家、フィリップ・グラスのヴァイオリン協奏曲第1番を並べる。ヴァイオリン独奏は、ハノーファー国際コンクールの覇者で、大河ドラマ「真田丸」のテーマ曲の演奏でも注目を浴びた新鋭・三浦文彰。初挑戦するグラスの協奏曲での、若さに満ちたエネルギッシュな演奏に期待が高まる。

後半はドヴォルザークの〈新世界から〉で、下野が渾身のタクトをとる。下野と読響は国内で初めて同一コンビでドヴォルザークの交響曲全曲演奏を成し遂げており、その集大成の意味合いも込める。読響の正指揮者時代も含め10年超にわたる読響&下野の有終の美をぜひ！（文責：事務局）

読響チケットWEB

検索

新シーズンはカンブルラン指揮〈巨人〉で、華麗に開幕!

4/8 (土) 14:00 第196回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/9 (日) 14:00 第196回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ハイドン：交響曲 第103番〈太鼓連打〉

マーラー：交響曲 第1番〈巨人〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)



シルヴァン・カンブルラン

ドラマティックに描かれるバルトークの魅惑的で耽美な世界

4/15 (土) 18:00 第567回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

メシアン：忘れられた捧げもの

ドビュッシー：〈聖セバスティアンの殉教〉交響的断章

バルトーク：歌劇〈青ひげ公の城〉(演奏会形式)

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

ユディット：イリス・フェルミリオン (Ms)

青ひげ公：バリント・ザボ (Br)



イリス・フェルミリオン



バリント・ザボ

ウィーンの俊英が初登場&ショパン・コンクールの覇者が共演

4/21 (金) 19:00 第601回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/23 (日) 14:00 第95回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ウェーバー：歌劇〈魔弾の射手〉序曲

グリーグ：ピアノ協奏曲

ドヴォルザーク：交響曲 第7番

指揮：サッシャ・ゲッツェル

ピアノ：ユリアンナ・アヴデーエワ



サッシャ・ゲッツェル



ユリアンナ・アヴデーエワ

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

“ハープの貴公子”メストレが名曲〈アランフェス〉で聴衆を魅了!

5/26 (金) 19:00 第602回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/27 (土) 14:00 第96回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

5/28 (日) 15:00 第5回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

芥川也寸志：弦楽のための三楽章〈トリプティック〉

ロドリゴ：アランフェス協奏曲 (ハープ版)

ブラームス：交響曲 第1番

指揮：尾高忠明 (名誉客演指揮者)

ハープ：グザヴィエ・ドゥ・メストレ



尾高忠明



グザヴィエ・ドゥ・メストレ

新鋭ブレンドウルフが〈シェエラザード〉で描く幻想的な物語

6/11 (日) 14:00 第97回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

6/13 (火) 19:00 第603回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

シベリウス：交響詩〈トゥオネラの白鳥〉

ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲 第1番

リムスキー=コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉

指揮：ダニエル・ブレンドウルフ

チェロ：宮田 大



ダニエル・ブレンドウルフ



宮田 大

ウィーン国立歌劇場などで活躍する女性指揮者ヤングが初登場!

6/17 (土) 14:00 第198回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

6/18 (日) 14:00 第198回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ワーグナー：歌劇〈さまよえるオランダ人〉序曲

ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲 第1番

ブラームス：交響曲 第2番

指揮：シモーネ・ヤング

ヴァイオリン：ネマニャ・ラドウロヴィチ



シモーネ・ヤング



ネマニャ・ラドウロヴィチ

東京芸術劇場シアターオペラ vol.10 全国共同制作プロジェクト

■2/18(土) 14:00、2/19(日) 14:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：ミヒャエル・バルケ 演出：笈田ヨシ

出演：小川里美(2/18)、中嶋彰子(2/19)、鳥木弥生、

サラ・マクドナルド、ロレンツォ・デカーロ、ピーター・サヴィッジ ほか

プッチーニ／歌劇〈蝶々夫人〉(新演出、全幕・日本語字幕付原語上演)

[料金] S ¥10,000 A ¥8,000 B ¥6,000 C ¥4,000 D ¥3,000 E ¥1,500
SS ¥12,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296

2017 都民芸術フェスティバル

■2/24(金) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：ミヒャエル・バルケ ピアノ：シャルル・リシャール＝アムラン

ウェーバー／歌劇〈魔弾の射手〉序曲

ショパン／ピアノ協奏曲 第2番

シューマン／交響曲 第1番〈春〉

[料金] A ¥3,800 B ¥2,800 C ¥1,800

[お問い合わせ] 日本演奏連盟事務局 03-3539-5131

日本テレビ「読響シンフォニックライブ」公開収録

■2/28(火) 19:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：田中祐子 ピアノ：小林愛実

シューマン／ピアノ五重奏曲から第1楽章、ピアノ協奏曲

ストラヴィンスキー／バレエ音楽〈ペトルーシュカ〉(1947年版)

[お問い合わせ・詳細] 「読響シンフォニックライブ」ホームページ
<http://www.ntv.co.jp/yomikyo>

[応募締切] 1/27(金) 当日消印有効

鹿児島公演

■3/12(日) 15:30 鹿児島市民文化ホール

指揮：下野竜也 ヴァイオリン：アレクサンドラ・スム

モーツァルト／ヴァイオリン協奏曲 第3番

ブルックナー／交響曲 第7番

[料金] S ¥6,000 A ¥4,500 B ¥4,000 C ¥2,000

[お問い合わせ] 鹿児島市民文化ホール 099-257-8111

港町・横浜のしゃれた雰囲気にあわせ、週末・休日の午後にお届けする《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》。読響が創立55周年を迎える2017年度（2017-18シーズン）は、例年以上に充実した内容をご用意しました。

みなとみらいホリデー名曲シリーズ

世界水準のソリスト

2017年度の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》最大のポイントは、ソリストの豪華な顔ぶれです。

まず4月の幕開けは、2010年のショパン国際ピアノ・コンクールで優勝したロシアのユリアンナ・アヴデーエワが、グリーグのピアノ協奏曲で華麗に飾ります。深々とした叙情をたくましい技巧によって引き出すでしょう。5月にはハープの名手、グザヴィエ・

ドウ・メストレが、元はギターの名曲であるロドリゴ〈アランフェス協奏曲〉をハープ版で鮮やかに弾きこなします。6月は、国内の若手チェリスト筆頭格の宮田大が登場。ショスタコーヴィチのチェロ協奏曲第1番を、



ユリアンナ・アヴデーエワ
©Christine Schneider



グザヴィエ・ドウ・メストレ
©Udo Titz



宮田 大
©Yukio Kojima

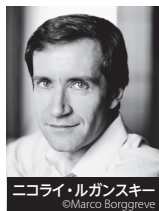
複雑な要素に目を配りながら歯切れよく仕上げます。

秋以降は、ロシアからダニール・トリフォノフ(9月)にニコライ・ルガンスキー(18年2月)と、ピアノの名手二人が来演します。前者は先鋭な曲想がダイナミックに炸裂するプロコフィエフのピアノ協奏曲第2番を、指さばきも鮮やかに料理します。後者は、おなじみチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番で濃厚なロシア情緒をみずしく歌いあげ、堂々たる解釈を聴かせてくれるでしょう。

常任指揮者シルヴァン・カンブルランとブラームスのヴァイオリン協奏曲で共演するイザベル・ファウスト(同1月)にも注目。鋭い解釈で作品へ切り込むアプローチを深めています。



ダニール・トリフォノフ
©Dario Acosta



ニコライ・ルガンスキー
©Marco Borggreve



イザベル・ファウスト
©Detlev Schneider

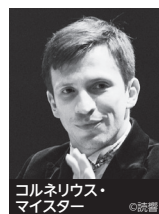
充実の指揮者陣

読響指揮者陣は、そろって人気シンフォニーで手腕を披露します。



シルヴァン・カンブルラン
©読響

常任指揮者カンブルランは作品を洗い直す清新な視点から、ベートーヴェン〈運命〉をスタイリッシュに仕立てます(18年1月)。この回は「ドイツの3大B」と呼ばれるバッハ、ベートーヴェン、ブラームスの作品を並べたプログラムになります。



コルネリウス・マイスター
©読響

17年4月から首席客演指揮者に就任するコルネリウス・マイスターは、ドイツ期待の若手。ウィーン放送交響楽団の音楽監督として本場で培った実力を携え、ベートーヴェン〈田園〉を爽やかに響かせます(9月)。



ユーリ・テミルカーノフ
©読響

名誉指揮者のユーリ・テミルカーノフは、得意のロシア物からラフマニノフの交響曲第2番を取り上げます(18年2月)。流麗な旋律が波のようにうねる傑作をしなやかに歌わせ、たっぷり堪能させます。

円熟の極みを迎え、音楽のスケールが増している名誉客演指揮者の尾高忠明は、ブラームスの交響曲第1番を雄

大に響かせるでしょう(5月)。

“炎のマエストロ”の愛称がある特別客演指揮者、小林研一郎はベルリオーズ〈幻想交響曲〉(18年3月)で完全燃焼し、パワフルに読響をドライブします。

年末恒例のベートーヴェン〈第九〉を指揮するのは、フランスの名匠、エマニュエル・クリヴィヌ(12月)。近年は作曲当時の演奏法を意識した解釈を採り入れ、芸風を広げています。国内随一のプロ合唱団である新国立劇場合唱団が、しっかりコーラスを固めます。

読響初登場の新鋭指揮者にも期待が集まります。オーストリア出身でウィーン・フィルのヴァイオリン奏者だったサツシャ・ゲッツェルはドヴォルザークの交響曲第7番など(4月)、スウェーデン出身のダニエル・ブレンドゥルフはリムスキー=コルサコフの交響組曲〈シェエラザード〉ほかを情緒豊かに聴かせます(6月)。



尾高忠明
©Martin Richardson



小林研一郎
©読響



エマニュエル・クリヴィヌ
©Christian Aschman



サツシャ・ゲッツェル
©Ozge Balkan



ダニエル・ブレンドゥルフ
©Marco Borggreve



よみうり大手町ホール

東京・大手町の読売新聞ビルにある「よみうり大手町ホール」で開く読響アンサンブル・シリーズは、毎回完売が続いています。501席という親密な空間で、読響の名手たちが奏でる室内楽を楽しむ贅^{ぜいたく}沢なひとときが、大好評です。会場の素晴らしい響きや地下鉄大手町駅から至近という抜群のアクセスも、人気の秘密です。本番開始（19時30分）前の19時からプレ・トークがあります。2017年度は4回の公演を予定します。



日下紗矢子 ◎読響

初回の6月19日は、読響コンサートマスターの日下紗矢子がリーダーを務める室内合奏団が登場。本場ベルリンでも室内楽にいきなり日下が率いるだけに、期待が高まります。ショスタコーヴィチ（バルシャイ編）の室内交響曲 作品73a、シューベルト（マーラー編）の〈死と乙女〉を取り上げます。いずれも小編成作品の傑作です。

2回目の9月19日には、読響コンサートマスターの長原幸太を中心とする弦楽アンサンブルが熱演を展開。今年度の同シリーズでも評判だった弦楽五重奏によるベートーヴェンの交響曲から第8番を演奏します。後半はロマンティックな旋律が横溢^{おういつ}するブラームスの弦楽六重奏曲第1番。特に第2楽章の主題は映画にも使われ、有名です。



長原幸太 ◎読響

12月4日に開く第3回は、読響コンサートマスターの小森谷巧らによるオール・ブラームス・プロ。前回の続編となる弦楽六重奏曲第2番のほか、ピアノ三重奏曲第2番などから、濃厚な味わいと深みのある陰影を引き出します。ピアノは若手の須関裕子が務めます。



小森谷 巧 ◎読響

最終回は2018年2月6日に、指揮者の上岡敏之がピアニストとして出演し、読響が誇る木管の達人たちと軽妙な合奏を繰り広げます。プーランク〈ピアノと木管のための六重奏曲〉を中心に、デュオによる作品も組み合わせます。緩急自在な上岡のピアノが触発する活発な語らいをお楽しみに。



上岡敏之 ◎読響